

“The Three Ravens” と “La Belle Dame sans Merci” —鳥をめぐるバラッドの世界—

鎌田 明子

Maureen N. McLaneは*Balladeering, Minstrelsy, and the Making of British Romantic Poetry*¹のConclusionで伝承バラッドの“The Three Ravens” (Child 26)の系譜を提示し、キーツの“La Belle Dame sans Merci”をこの系譜に加えている。カラスが登場しないキーツの作品が何故この系譜の中に加えられているのか、その理由を考えることで、キーツや後世の詩人が伝承バラッドから何を変化させ、何を受け継いでいるのかを考察してみたい。

マックレーンはキーツの作品を「三羽のカラス」の系譜に加える理由として構造の対称性、すなわち「三羽のカラス」では死んだ騎士について鳥が歌い、「つれなき美女」では死なない騎士について鳥が歌わないという構造上の対称性を上げている。伝承バラッド「三羽のカラス」ではえさを探す三羽のカラスが次の様に歌う。

1.
There were three rauen sat on a tree,
Downe a downe, hay down, hay downe
There were three rauen sat on a tree,
With a downe
There were three rauen sat on a tree,
They were as blacke as they might be.
With a downe derrie, derrie, derrie, downe, downe
2.
The one of them said to his mate,
'Where shall we our breakefast take?'
3.
'Downe in yonder greene field,
There lies a knight slain vnder his shield.
4.
'His hounds they lie downe at his feete,
So well they can their master keepe.
5.
'His haukes they flie so eagerly
There's no fowle dare him come nie.'
6.
Downe there comes a fallow doe,

¹ Maureen N. McLane, *Balladeering, Minstrelsy, and the Making of British Romantic Poetry* (Cambridge University Press, 2008).

As great with yong as she might goe.

7.

She lift vp his bloody hed,
And kist his wounds that were so red.

8.

She got him vp vpon her backe,
And carried him to earthen lake.

9.

She buried him before the prime,
She was dead herselfe ere euen-song time.

10.

God send euery gentleman,
Such haukes, such hounds, and such a leman. [“The Three Ravens”(Child 26)]²

ここではカラスが野で死んだ騎士について歌う。騎士の犬は足元を離れず、鷹は騎士の上空を飛び、死肉を食べようとする獣や鳥からその主を守り、雌鹿に姿を変えた騎士の恋人は騎士を洞窟に埋めて自分もまた死んでしまう。

一方キーツの作品では「三羽のカラス」とは異なり、鳥は歌わない。「つれなき美女」の第一スタンザは次のようになっている。

O What can ail thee, knight at arms,
Alone and palely loitering?

The sedge has wither'd from the lake,

And no birds sing. (John Keats, “La Belle Dame sans Merci”, st. 1)³

情景描写から考えるとこの4行目の ‘no birds sing’はスゲも枯れ、生きるものがないわびしい湖畔の状況を表すのみのようにも思われるが、バラッドの系譜の中においてみるとこの一節はまた別の意味を持つてくる。キーツ自身この作品に“A Ballad”と付していることからわかるように彼はこの作品をバラッド詩として書いた。キーツが“A Ballad”と題し、同時に ‘no birds sing’と書いたとき、何らかの意図があったのではないか。というのも、伝承バラッドでは人間の言葉を語る鳥や動物がしばしば登場し、特定の役割を担っているからである。ここでは鳥についていくつか例を見ながら伝承バラッドの中で鳥がどのような役割を担っているかまず整理したい。

“Lady Isabel and the Elf-knight” [Child 4 (C, D, E, F, G)]では人の言葉を語るオウムが登場する。ヒロインのメイ・コルビンはサー・ジョンに森へ誘われる。そこでサー・ジョンはメイ・コルビンに「今までに7人の王の娘を殺した。おまえもここで死ぬ運命だ」

² Francis James Child ed., *The English and Scottish Popular Ballads*, 5 vols (New York: Dover, 1965).この論文における伝承バラッドからの引用はすべてこの版による。

³ John Keats, *Complete Poems*, ed. Jack Stillinger (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1978).この論文におけるキーツ作品からの引用はすべてこの版による。

と告げるが、メイ・コルビンは「それでは7人の娘の夫としてここに眠りなさい」とサー・ジョンを殺し無事に城に戻ってくる。城に戻ってきた彼女に飼っていたオウムが次のように呼びかける。

Up then and spoke the pretty parrot:
‘May Colven, where have you been?
What has become of false Sir John,
That woo’d you so late the streen?’

‘He woo’d you butt, he woo’d you ben,
He woo’d you in the ha,
Until he got your own consent
For to mount and gang awa’

[“Lady Isabel and the Elf-knight” (Child 4C), sts. 13, 14]

オウムの言葉だけではイザベルのコルビン殺しをオウムが知っているかどうかは曖昧だが、その後のイザベルとのやり取りの、「私を責めないで」などの言葉から、おそらく真実を知っているのだろうと推測される。ここでオウムは誰も知らないはずのことを知っているという特徴を持っているが、この特徴がより鮮明に描かれている例は “Young Hunting” (Child 68)である。

“Young Hunting”ではクライド川でおぼれたらしい（実際には恋人に殺された）ハンティングを城のものが探す。いくら探しても見つからないでいると、きれいな小鳥が飛んできて、次のように語りだす。

Out an spake the bonny bird,
That flew abon their heads,
.....
.....

‘O he’s na drownd in Clyde Water,
He is slain and put therein;
The lady that lives in yon castil
Slew him and put him in.

‘Leave aff your ducking on the day,
And duck upon the night;
Whear ever that sakeless knight lys slain,
The candels will shine bright.’ [“Young Hunting” (Child 68A), sts. 20-22]

ここで鳥はハンティングの死にまつわる全てのことを知るものとして登場している。ハンティングの沈められた場所のを見つけ方、恋人によって殺されたという死の真相を知って暴露するのである。この人の知り得ないものを知るという特性は“The Broomfield

Hill” (Child 43), “The Carnal and the Crane” (Child 55), “The Bonny Birdy” (Child 82) などの作品にも見られる。

また別の特徴として真実の思いを伝えるものとしての働きも担っている。“The Gay Goshawk” (Child 96A)ではスコットランドの騎士のイングランドの恋人への思いを伝えるオオタカが描かれている。

O first he sang a merry song,
An then he sang a grave,
An then he peckd his feathers gray,
To her the letter gave.

‘Ha, there’s a letter frae your love,
He says he sent you three;
He canna wait your love langer,
But for your sake he’ll die.

‘He bids you write a letter to him;
He says he’s sent you five;
He canno wait your love langer,
Tho you’re the fairest woman alive.’ [“The Gay Goshawk” (Child 96A), sts.10-12]

この作品ではオオタカが恋人への思いを伝える役割を担っているが、鳥が愛を伝えるバラッドとしては、他に“Lord William, or Lord Lundy” (Child 254)や、変身譚で鳩に姿を変えた騎士が真実の愛を得る “The Earl of Mar’s Daughter” (Child 270)などがある。また“Johnie Cook” (Child 114B, F)ではジョニーが死にそうなことを椋鳥が母に伝えている。これらのバラッドでは鳥は人の真実の思いを伝えるものとして働いている。

さらに伝承バラッドの鳥には人の生死に立ち会うもの、深くかかわるものとしての姿がある。すでにあげた “Lady Isabel and the Elf-knight” (Child 4)や “Young Hunting” (Child 68)では鳥は殺人の真相を知っており、“Alison and Willie” (Child 256, st. 10)では ‘The birds waur Willie’s companie’ と書かれ、死んでゆくウィリーによりそう小鳥が象徴的な姿で歌われている。

大まかにまとめると、伝承バラッドでの「鳥」の位置付けは人知が及ばぬものを知るもの、真実を語るもの、真実の思いを伝えるもの、人の生死に深くかかわるものといえる。

一方キーツ作品の中では「鳥」はどのような意味を持つのだろうか。キーツ作品の中に登場する鳥の描写をいくつか見てみたい。キーツ作品でも伝承バラッドと同じように鳥に生死のイメージが結び付けられている例がある。

Therefore they watch’d a time when they might sift
This hidden whim; and long they watch’d in vain;

For seldom did she go to chapel-shrift,
And seldom felt she any hunger-pain;
And when she left, she hurried back, as swift
As bird on wing of breast its eggs again;
And, patient as a hen-bird, sat her there
Beside her basil, weeping through her hair. (Isabella, st. 59)

ここではイザベラが兄弟に殺された恋人のロレンツォの首を抱く姿が卵を抱く鳥にたとえられる。卵を抱く鳥はもちろん生命の誕生を連想させるが、ここで抱いているのは生命ではなく死んだロレンツォの首すなわち死である。ここでは死と生のイメージが重ねられているがこれは作品で描かれているロレンツォの首の上に植えたバジルが美しく育っていく作品全体のイメージに合致する。



キーツの作品で鳥が登場する代表的なものといえば、やはり“Ode to a Nightingale”だろう。このオードの第7連でナイチンゲールは次のように描かれている。

Thou wast not born for death, immortal Bird!
No hungry generations tread thee down;
The voice I hear this passing night was heard
In ancient days by emperor and clown:
Perhaps the self-same song that found a path
Through the sad heart of Ruth, when, sick for home,
She stood in tears amid the alien corn;
The same that oft-times hath
Charm'd magic casements, opening on the foam
Of perilous seas, in faery lands forlorn. (“Ode to a Nightingale”, st.7)

ここでナイチンゲールは‘immortal Bird’と呼ばれ、今詩人が聞く鳥の声が、古の支配者や、異国で故郷を思うルツの耳にも届いたと描かれている。このナイチンゲールは流れ続ける時間を超越した存在である。ではこのナイチンゲールはどんな歌を歌っているのだろうか。“Bards of passion and of mirth”には以下のように書かれている。

Where the nightingale doth sing
Not a senseless, tranced thing,
But divine melodious truth;
Philosophic numbers smooth;
Tales and golden histories
Of heaven and its mysteries. (“Bards of passion and of mirth”, ll. 17-22)

ナイチンゲールが歌うのは意味もなく浮かれたようなものではなく、聖なる真実の歌、たえなる瞑想の歌、天国の物語と黄金の歴史と神秘である。この特徴は伝承バラッドで見られる真実の思いを伝える鳥の姿と重なるが、特にナイチンゲールについては古くから「歌えない」という性質がついてまわることも忘れてはならない。Tereusに犯された Philomelaは真実を語れないように舌を切られてしまうが、このフィロメラが姿を変えたナイチンゲールには「真実を語りたくても語れない」という性格が付随する。“The Eve of St. Agnes”の23連ではマデラインがこのような舌のないナイチンゲールにたとえられている。

Out went the taper as she hurried in;
Its little smoke, in pallid moonshine, died:
She clos'd the door, she panted, all akin
To spirits of the air, and visions wide:
No uttered syllable, or, woe betide!
But to her heart, her heart was voluble,
Paining with eloquence her balmy side;
As though a tongueless nightingale should swell
Her throat in vain, and die, heart-stifled, in her dell. (“The Eve of St. Agnes”, st. 23)

ここでは声には出せない思いが、胸の内で膨れ上がり、その雄弁さ ‘eloquence’が胸をいためつける。その様子が思いを伝えたいのに語るができないナイチンゲールに重ねられている。

伝承バラッドとキーツの作品の持つ鳥のイメージを整理してみると「つれなき美女」でキーツが何を排除したのかが見えてくる。まず伝承バラッドやIsabellaの鳥に象徴される「生死」のイメージである。キーツはこの作品の騎士を生と死どちらのイメージにも傾かないように配慮している。「つれなき美女」でキーツは

I see a lily on thy brow
With anguish moist and fever dew,
And on thy cheeks a fading rose
Fast withereth too. (“La Belle Dame sans Merci”, st. 3)

と書くが、この ‘lily’, ‘fading rose’はもともとこの作品が書かれた弟夫妻に宛てた手紙の中では ‘death’s lily [sic]’, ‘death’s fading rose’と書かれていた。この ‘death’s’の削除はもともと「生」のイメージがうすい青ざめた騎士から「死」のイメージも奪い、作品をキーツに特徴的な物事が解決する直前の曖昧な状態に押しとどめる効果を持っている。

さらに「つれなき美女」の世界は「ナイチンゲールのオード」のナイチンゲールに象徴される時の流れも拒否する。「ナイチンゲールのオード」の鳥は ‘Immortal Bird’で時を超越した存在ではあるが、このオードの中の鳥の時が止まっているわけではない。この鳥の歌が

「古の支配者やルツの耳にも聞こえた」と歌うことによって‘Immortal Bird’の中を通り過ぎていったとどまることのない時はかえって強く意識される。その一方で、「つれなき美女」は冒頭連と最終連が同じになっており、一つの大きな円を描く構造になっている。質問者の問いは解決されることなく何度でも繰り返され、騎士は同じ世界を生きるでも死ぬでもなくさまよい続ける。その世界は批評家パターソンが「恐るべき静止」と評した不安定な静止状態である。この静止状態の中で繰り返し歌を歌うのは騎士自身である。つまり「つれなき美女」には人知を超えた視点が存在しない。「三羽のカラス」の騎士の頭上高くにいる鳥の視点は、騎士の犬、鷹、さらに城で待つ恋人まで見渡す。その視野の広さは人間の及ぶものではない。これとは対照的に、キーツの作品での騎士の視点は騎士の内面にとどまる。彼が語るのは彼の知る世界すなわち彼の内面世界である。それは第4連から第11連まで過去形で語られる、妖精の女性との出会い、旅路、王や戦士との出会いの記憶、すなわち騎士のみしか知りえない世界で、もはやそこに“Lady Isabel and the Elf-knight”や“*Young Hunting*”のように人の知らない真実を語る鳥が入る余地はない。伝承バラッドのムクドリやオオタカが母や恋人に思いを伝え、“*The Eve of St. Agnes*”で伝えたい思いに胸が張り裂けそうになるナイチンゲールも存在しない。なぜならば、騎士には思いを伝えるべき他者が存在しないからだ。「つれなき美女」に唯一現れる他者は冒頭の質問者である。この質問者が発する質問は最終場面で騎士によって繰り返される。それによってこの作品は円環となるが、この最終連によって騎士の世界が閉じたとき、質問者はもはや騎士から完全に切り離された他者としては存在していない。すなわちこの作品中には完全なる他者は存在しておらず、騎士は真実の思いを人に伝える鳥を必要としていない。

すなわちキーツが描いた「鳥が歌わないバラッド」の世界とは生死のはざまにとどまる外界から遮断され、時の止まった内面世界である。これは伝承バラッドでは語られることのなかった世界である。伝承バラッドで描かれるのは生か死かはっきりとした世界である。亡霊が生きた者と同じく肉体を持ったり、生きている人と語り合ったりはするが、死んでいることに変わりはなく、キーツのような「死なない人間」は存在しない。また伝承バラッドではもっぱら行動が描かれ、個人的な感情や内面的な描写は一切排除される非個性、没個性が大きな特徴である。キーツの作品を「三羽のカラス」の系譜に組み入れて考える時、キーツは伝承バラッドで排除されてきた非常に個人的な内面世界の描写を新たにバラッドの世界に取り入れたといえることができる。

「つれなき美女」を「三羽のカラス」の系譜に加えるに際して次にパロディについて考察してみたい。“*The Three Ravens*”には“*The Twa Corbies*”という異版が存在する。マザーウェルはこの「二羽のカラス」のほうを「三羽のカラス」の元歌としており、チャイルドは「二羽のカラス」を「三羽のカラス」のパロディと位置付けているが、この二つのバラッドは

どちらかが元でどちらかがそこから派生した異版というよりは対を成す同等の作品として考えてよいだろう。「二羽のカラス」は次のようなバラッドである。

1.

As I was walking all alane,
I heard twa corbies making a mane;
The tane unto the t’other say,
‘Where sall we gang and dine to-day?’

2.

‘In behint yon auld fail dyke,
I wot there lies a new slain knight;
And naebody kens that he lies there,
But his hawk, his hound, and lady fair.

3.

‘His hound is to the hunting gane,
His hawk to fetch the wild-fowl hame,
His lady’s ta’en another mate,
So we may mak our dinner sweet.

4.

‘Ye’ll sit on his white hause-bane,
And I’ll pike out his bonny blue een;
Wi ae lock o his gowden hair
We’ll theek our nest when it grows bare.

5.

‘Mony a one for him makes mane,
But nane sall ken where he is gane;
Oer his white banes, when they are bare,
The wind sall blaw for evermair.’ [“The Twa Corbies” (Child 26, Headnote)]



チャイルドにならって「二羽のカラス」を「三羽のカラス」のパロディと考えるとき、ここでパロディ化されているのはなんだろうか。足元でなきがらを守っていた犬は狩りに出かけ、死骸を狙う鳥を追い払っていた鷹もえさを探しに飛んでゆく。鹿に姿を変えて騎士の元にやってきていた恋人は新たな恋人を見つけたと歌われる。一つ一つの事象とともに「三羽のカラス」の物語全体のテーマである「死んでも変わらない忠誠心」がパロディ化されている。変わらないと信じる、あるいは信じたいと願う聴き手に対して、騎士の死肉が朽ちる前からすっかり変化してしまう現実が強烈な皮肉として歌われている。

キーツの「つれなき美女」にもパロディと考えられる詩が存在する。Edwin Muirは “The Enchanted Knight” (1937)と題して次のような作品を書いている。

Lulled by La Belle Dame Sans Merci he lies
In the bare wood below the blackening hill.
The plough drives nearer now, the shadow flies
Past him across the plain, but he lies still.

Long since the rust its gardens here has planned,
Flowering his armour like an autumn field.
From his sharp breast-plate to his iron hand
A spider's web is stretched, a phantom shield.

When foot steps pound the turf beside his ear
Armies pass through his dream in endless line,
And one by one his ancient friend appear;
They pass all day, but he can make no sign.

When a bird cries within the silent grove
The long-lost voice goes by, he makes to rise
And follow, but his cold limbs never move,
And on the turf unstirred his shadow lies.

But if a withered leaf should drift
Across his face and rest, the dread drops start
Chill on his forehead. Now he tries to lift
The insulting weight that stays and breaks his heart.⁴

ミュアの作品ではキーツが鳥に歌わせないことによって排除したものが再び持ち込まれている。冒頭の2行ではキーツの作品を想起させる風景が描写される。「つれなき美女」でスゲも枯れた野にさまよっていた騎士は、今、葉の落ちた木の根元で横たわっている。冒頭2行の騎士の様子はキーツの騎士よりもさらに生気がなく動きもないが、3行目でその世界は微妙に変化する。‘the plough drives nearer now’とかかかれているが、この比較級の‘nearer’と‘now’によって「昔」すなわちキーツの騎士の時との比較が想起される。キーツの騎士には近づいてこなかった鋤が今、徐々に近づいている。キーツの騎士が ‘Alone’であったのとは異なり、ミュアの騎士の周りには鋤を扱う農夫がいる。この比較級の表現は、時の流れをうむ。キーツの騎士以来静止していた時間が動き出す。この流れ出した時とともに3、4行目では通り過ぎる影 ‘the shadow’が描かれている。この影は ‘flies’とかかかれていることから鳥の影であることがわかる。この鳥の影は ‘past him across the plain’ と大きく動いている。つまり「つれなき美女」で排除されていた鳥が影として時の流れと大きな動きを伴って戻ってくるのだ。しかし騎士は影が通り過ぎても ‘he lies still’ とかかかれている通り動かない。

第2連では視点が変わる。キーツの世界が騎士の視点から描かれていたことから変化してここでは騎士の姿が描かれる。「三羽のカラス」での鳥の視点が戻ってきている。外界から見る騎士の姿はなんとも哀れである。鳥の声を遮断し、時間の流れを拒否してひたすら内面世界をさまよっている間にも、騎士の周りで時間は容赦なく流れ、よろいにはさびが

⁴ 山中光義ほか編著『英国バラッド詩60撰』九州大学出版会、2002年。

生え、蜘蛛が体中に巣を張っている。

続く第3連では騎士の夢と現実が交差する。騎士の耳元で足音が響く時、騎士の夢の中には武具を身につけた騎士たち、古の友人たちが1人ずつ ‘endless line’ となって現れる。一行目にある ‘the turf’ は第4連4行目にも書かれており、第4連の方では明らかに現実世界を現しているの、この足音は夢の中の足音ではなく、現実世界で騎士のそばを歩きかう農夫たちの足音と解釈することができる。つまり夢の中の騎士たちは現実の足音に呼応する形で現れている。騎士の意識が外界とつながりを持ち始めている。ここで騎士の動きは第1連とは異なり ‘he can make no sign’ と書かれる。ここでの ‘can’ は「実は動きたいけれども動けない」という騎士の心理を隠していないだろうか。

第4連で騎士の世界が劇的に変化する。ここでキーツの作品で声を失った鳥が再び声を得ている。鳥の長く失われていた声、‘The long-lost voice’ が聞こえてくると、夢の中をさまよっていた騎士の意識が外に向かい、立ち上がってその後を追おうとする。3連で騎士が夢の中の人物に答えようとしていたこととは明らかに異なり、この連で騎士は初めて現実世界の鳥に反応しようとする。しかし時はすでに遅く、騎士の体は冷え切りこわばって動かない。4行目の ‘his shadow lies’ は第1連3行の ‘the shadow flies’ と呼応し、軽やかに空を舞う鳥と重い騎士の体が鮮明な対照をなして描かれている。

鳥の声に反応した騎士に外界からの刺激が続いて描かれる。顔の上にかかるしおれた木の葉から冷たいしずくが落ちると、彼はそれに答えるように ‘insulting weight’ を払おうとする。この ‘insulting weight’ は、顔にかかる木の葉、滴、かたくこわばった騎士の体、騎士をとらえている ‘La Belle Dame Sans Merci’ の呪縛など様々な意味に読めるが、最も ‘insulting’ なものとして騎士を苦しめているものは、知らない間に過ぎてしまった時間の長さだろうか。知らない間に時が過ぎ、体の動かなくなった騎士にとって、時間は侮辱するような重さとなつてのしかかり、心を引き裂くものとなった。キーツの「死なない」騎士はミュアの作品の中で指一本動かさない「死にそうな」騎士として描かれている。

ミュアがここで描くのは、動かずに夢を見るように眠っていた騎士と、騎士の内面世界などお構いなしに流れ続ける外界とのギャップであり、時の流れに取り残された騎士の滑稽な姿である。すなわち彼がパロディ化しているのは作品に描かれる騎士の姿だけではなく、作品の円環構造や、内へ内へと向かうキーツの世界そのものである。

“The Three Ravens”, “Twa Corbies”, “La Belle Dame sans Merci”, “The Enchanted Knight” を「鳥」を軸とした一連のパロディの流れとして捕らえるとどの様なことがいえるだろうか。ある作品をパロディ化するという行為は作品そのものだけではなくその背後にある聴衆の心理や願望、作者の世界観を読み解いてその裏をかいてみせることである。「三羽のカラス」の「二羽のカラス」におけるパロディは死んでも忠誠心を変わずもち続

けて欲しいという聴衆の願望の裏をかいた世界を演出している。さらにキーツは「三羽のカラス」、「二羽のカラス」の2作品で描かれる死後も変化してほしくないという願いと、死んでしまうと願望に反して変わってしまう現実への聴衆の恐れを敏感に察知してこの恐れに対するある種の理想ともいえる死なない騎士を描く。結果として生まれたのは現実に逆らって変化しないことによって生み出される不安感という皮肉である。さらにミュアは伝承バラッドからキーツへの変化やキーツ作品全体が持つ構造を引き受けて「死なない騎士」の滑稽さを描いてみせる。この鎖のようなパロディ化の流れの中に作品全体を取り込んで新たな世界を読みこんでいく人々のバイタリティと、そもそも様々な要素を含みうるだけの作品の柔軟性が引き継がれているといえる。

[本論文は2010年7月3日第95回イギリス・ロマン派学会「四季談話会」(於、大妻女子大学)における発表原稿に加筆修正を加えたものである。]